NICU退院児のホームケアシステム

総　括　報　告　書

分担研究者：東京女子医大母子総合医療センター新生児部門
仁志田　博　司

研　究　目　的

NICUの全国的な普及および新生児医療の進歩に伴い，従来ではその生存が望めなかった超未熟児及び重症新生児が生存するようになった。それらの生存児の予後は必ずしも悪いものではなく，正常な児として退院して行く者の比率は逆に，以前より低くなっていることが示されている。しかしながらNICUの恩恵を受ける児の対象が広がったために，全体的な総数としては障害を有する児の数は増加している。そのような障害を有した児を長期的に管理することに関して，(1)　児は家庭でcareされるのが最も望ましく，出来る限り家庭に戻すべきである，(2)　NICUの機能のより有効的な利用が望まれる，の2点から，NICU退院児のホームケアシステムの重要性が浮かび上がってきた。

本研究では本邦におけるNICU退院児の中で障害を有する者，及びそれらの児がどのようにケアされているかの実態を調査し，その問題点をあげ，時代に即したそれらの児のホームケアシステムのプランニングを行なうことを目的とした。

研究成果の概要

本研究班は山口研究協力者を中心とし，石崎および増本研究協力者を加えた3人による中枢神経系の障害を有した児のホームケアシステムと，宮坂研究協力者を中心とし，竹内，我那覇両研究員を加えた3人による慢性呼吸不全を有した児のホームケアシステムの2つの点に焦点を絞って研究を進めることとした。初年度は各研究員が各自の施設におけるNICU退院児の実態を分析し，問題点をあげ，次年度の研究の資料とすることとした。

山口は極めてハイリスク児が集中する施設である東京女子医大母子総合医療センターにおける中枢神経系の障害を有した児の発生率を検討し，年間NICUに入院した653名中，約4.1％であったとしている。その神経学的障害児の52％が染色体異常などの出生前要因であり，さらに44％が胎児の母体環境によるものであった。すなわち神経系障害児のほとんどが既に出生前にその原因が求められていることを示した。さらにそれらの児のフォローアップに関しては，単に医療機関のみならず，養育施設や行政福祉施設との密接な関連が重要であることを示した。

石崎は重症心身障害児の施設である，都立府中療育センターに入院した180例の児において，その起因疾患を分析したところ，やはり出生前要因および出生時要因が132名（75％）であると示した。またそれらの障害児のnatural historyを知る上からそれらの児の生命予後についての検討を行い，70％が15歳未満で死亡し，その原因としては肺炎が最も大きなものであることを示した。また10歳から25歳までの障害児の死因の中には，急性心不全を含む突然死が極めて多いことが特徴的であったとしている。

増本は国立長崎中央病院を中心とした保健所，整肢療育院，重心施設との相互協力による心身障害児の管理体制の現状を示した。また障害児のホームケアの実例を示し，家族のサポート，急性疾患発生時のサポート，および誰が主治医となって包括的なケアをするか，などの問題点をあげた。

宮坂はフィラデルフィア小児病院における在宅人工換気のシステムを紹介し，その54％が最終的には人工換気から離脱できたことを示し，その医学的な面からの有用性を強調した。さらに経済面からもホームケアシステムはNICU入院によるケアよりも，80％の医療費の節減が得られたことを示している。また国立小児病院における気管切開下の在宅人工呼吸症例1例と，在宅酸素療法5例の経験をまとめ，その有用性ならびに家庭における実際の管理についての問題点を述べた。

竹内は松戸市立病院における入院中，重症新生児1783名の，入院中30日以上の酸素投与を必要とした，いわゆる慢性呼吸不全児117例（6.5％）に検討を加え，BPDおよびWilson-Mikity症候群は日齢60日を境にそれ以前の回復の程度が低下し長期化する傾向を示した。すなわち慢性呼吸不全によるホームケアシステムの対象となるNICU退院児は，NICUにおける呼吸管理が60日以上を過ぎた症例がその対象となる頻度が高いことを示した。

我那覇は沖縄中部病院NICUにおける21例の慢性呼吸不全の検討から，1250g未満がその80％を占め，小さな児に慢性呼吸不全としてホームケアシステムの対象となる児が多いことを示した。また5例の長期入院の慢性呼吸不全児の疾例を呈示し，その医学的な問題を検討し，ホームケアシステムがあれば，それらの症例は在宅管理が可能な症例であることを示した。

以上本研究班の本年度の研究として，各研究者の施設におけるNICU退院児の現状の検討と問題点の洗い出しを行なった。次年度は全国的な視野からNICU退院児の中でホームケアシステムの対象となるであろう障害児の発生頻度およびその実態を調査し，次々年度では日本の現状にマッチしたホームケアシステムの提言をする予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

NICU の全国的な普及および新生児医療の進歩に伴い,従来ではその生存が望めなかった超未熟児及び重症新生児が生存するようになった。それらの生存児の予後は必ずしも悪いものではなく,正常な児として退院して行く者の比率は逆に,以前より低くなっていることが示されている。しかしながら NICU の恩恵を受ける児の対象が広がったために,全体的な総数としては障害を有する児の数は増加している。そのような障害を有した児を長期的に管理することに関して,(1)児は家庭で care されるのが最も望ましく,出来る限り家庭に戻すべきである,(2)NICU の機能のより有効的な利用が望まれる,の2点から,NICU 退院児のホームケアシステムの重要性が浮かび上がってきた。

本研究では本邦における NICU 退院児の中で障害を有する者,及びそれらの児がどのようにケアされているかの実態を調査し,その問題点をあげ,時代に即したそれらの児のホームケアシステムのプランニングを行なうことを目的とした。